氷雨 吹き飛ばす熱戦。東京が初優勝、県勢ふるわず。
コースの仕上がりは満点 ― 国体ゴルフ・女子 ―

第 77 回国体・「いちご一会とちぎ国体」は 10 月 11 日、閉会式が行われ全日程を終了した。コロナ禍による延期を乗り越え、国体の開催は 3 年振り。ゴルフの女子会場となった塩原カントリークラブでは 6 日の練習日に続き、7、8 日の 2 日間にわたり、氷雨模様の悪コンデションにもかかわらず、連日、選手関係者を含め 150 人を超えるギャラリーが見守る中、熱い戦いが繰り広げられた。クラブ側からは緑川文雄キャプテン、早坂幸治コース委員長の理事 2 人、分科会委員 6 人、メンバー9 人が会場整理やフォアキャディとして大会を支えた。会場風景などを中心に、スナップ写真とともにアラカルトを拾ってみた。

【氷雨】

コンデションは練習日の 6 日から下り坂となり、試合初日は朝のスタート時から雨模様となった。気温も上がらず、南国からの選手たちは寒さをこらえながらのプレーとなった。中には、「携帯カイロはありませんか」という選手団からの問い合わせも相次いだ。試合 2 日目はさらに本降りとなった。気温も 10 度を超えず、前日の寒さにこりて、防寒用のインナーを買って着込み、震えながらのプレーがあちこちでみられた。
コロナの感染防止のため、会場に入場の際には体温検査を実施したが、高熱のためにシャットアウトされるケースはなかった。ただ、岩手県選手団のうちの 1 人が、コロナの陽性患者と判定され、同県の参加が認められなかった。

【女王】

プロ入りを目指す 10 代選手も少なくない中で、メディアやギャラリーの注目を集めたのが、馬場咲希選手（東京、日本ウエルネス高校）。今年の全米アマで、日本人として 37 年ぶりに優勝し、すでにプロのトーナメントにも出場している。
馬場選手の組には、ギャラリーがつき、細身ながら長身から振り抜いて距離を出すドライバーショットやグリーン周りの小技でうならせていた。こうした〝馬場人気〟に JGA（日本ゴルフ協会）では、写真撮影禁止の規制をかけて対処した。これを無視してシャッターを切って、係員から削除を求められた人も出た。馬場選手を擁した東京は女子ゴルフとしては初優勝に輝いた。

【コース】

雨が本格的になった 2 日目の昼前後に、男子会場の西那須野カントリー倶楽部、ホウライカントリー倶楽部ではグリーンに雨水が浮いて、排水、整備でプレーを中断するひと幕もあった。しかし、女子会場の塩原カントリークラブでは、雨水が浮くこともなく、整備の場面は全くなかった。
コース全体の傾斜の関係があるかもしれないが、国体会場に決まって以来、整備に心血を注いできた堀越三津夫社長らコース整備関係者もこれには鼻高々だった。JGA 担当者からも「コースには何の問題もありません。整備状況は最高でした」と高い評価得たという。
　堀越社長は「社員、キャディさんらだけでなく、コース委員会が率先して音頭をとってくれたコース整備のボランティア活動などメンバーの皆さんのご協力があったからこそです」と話している。グリーンの水はけのよさは、塩カンが誇れることとなったようだ。

【ハ　チ】

大会初日にはコース内で、ギャラリーがスズメバチに刺され、救急車の出動を要請するハプニングがあった。午後1時30分ごろ、15番ホールとして運用された、北6番の茶屋付近で、通りがかったチーム関係のギャラリーの一人がハチに刺された。続いて近くにいた4人が相次いで刺された。競技本部で救急車を要請、5人とも病院で手当を受け、大事に至らずに済んだ。
調べたところ、茶屋の軒下の屋根裏の隙間にスズメバチの巣があった。スズメバチに刺されると、大事に至る場合もあるだけに、競技関係者は胸をなでおろしていた。

【成績】

本県女子は 34 位、少年男子は準優勝

女子団体の優勝は東京都(430)、2位茨城県(436)、3 位兵庫県(438)。栃木県は 474 で 34 位だった。成年男子団体は愛知県(429)が 18 年ぶり 2 度目の優勝。2 位沖縄県(435)、3 位香川県(439)。栃木県は 9 位。少年男子団体は茨城県(431)で優勝、2 位栃木県(435)、3 位埼玉県(440)だった。

ご苦労様でした。氷雨に耐えて 18 人が協力。

競技には理事、分科委員、メンバーの以下の方々がボランティアでフォアキャディなどの裏方としてご協力いただきました。
●理　　事 緑川 文雄 様、早坂 幸治 様
●分科委員 大登 正雄 様、四ツ谷 定男 様、鈴木 英利 様、阿久津 誠 様、池田 文雄 様、吉松 孝文 様
●メンバー 早坂 ヨシ子 様、信田 明雄 様、吉松 敦子 様、館 治夫 様、印南 邦之 様、関家 修 様
関家 裕美 様、片股 秀行 様、都外川 佐代美 様

塩原カントリークラブ！攻略編！！【中コース】　― 中里　鉄也プロ ―

☆中コース７番 ☆

【コース解説】
　やや打ち上げ右ドックのミドルホール。

【中里プロからのアドバイス】
　1打目はフェアウェイセンターの1本松狙い。
右のバンカーに入れると次にグリーンを狙えないので
やや左に打ちたい。
2打目はグリーン右にバンカーがあるので左手前から
責めていきたい。
グリーンは左奥からの傾斜があるのでカップをオーバー
させたくない。

次回は、中コース８番を紹介します!!

那須の小天狗ー小針春芳伝ー⑱

井上　安正

　関西の戸田藤一郎、宮本留吉、関東の浅見録藏らの古参、中村寅吉、小野光一ら新進気鋭の若手の中で、小針春芳が飛距離で勝てるのは、一人もいなかった。彼らに勝つためには、ドライバーからパターまで、ボールの飛距離を自在に制御出来るようにならなければならない。それを身につけるために、小針が取り組んだのが、真っ暗闇の中での素振りだった。一人で黙々とクラブを振る。次第に、「ヘッドがボールに当たる時の速度を変えれば、飛び出すボールの勢いも距離も変わる」と感じてくる。飛距離を変えるには、ヘッドが動く速度を変えればいいという確信につながる。

　打っている格好を自分で見ることは、もともと出来ないが、暗闇のなかでは視覚そのものが休む分、聴覚が鋭敏になり、フォローでヘッドが空気を切り裂く音とスピードに相関関係があることに気付く。「ビュッ」なら速く、鈍くなるにつれて遅くなる。まったくの独学でそこから先を極めた。クラブを振って、音の強さ、長さ、響きを聞き分ける。それを繰り返していると、「ビュッ」と鳴った時の腕の振り方を、右手の先が感覚として覚えてくる。「ボールを制御するには、スイングアークを変えるのではなく、ヘッドスピードを変える」のが肝心だとわかった。

　しかし、こういう感覚は頭で考えることではなく、練習で自分の体に覚え込ませることだ。「ヘッドの動きとフェースがボールに当たる向きで、球の性質を変える。これがワイの個性です。今は道具も情報もあふれるほどある。でも、自分流が作れない。自分で工夫して猛練習を重ねる。それがない」と、今の若手への苦言も忘れなかった。

「元祖・ハイティーアップ」。小針には異名がいくつもあるが、これもその一つである。
ゴルフ用品のひとつのティーとは直径一㌢ほどの逆円錐形の台に長さ5㌢前後の地面に刺す杭が出ており、第一打はティーグランドにティーを刺し、その上にボールを乗せて打ち出す。それをティーショットと言う。その昔、ティーショットは一握りの砂の上にボールを置いて、それを打った。ティーには「一握りの砂」という意味もあるという。ティーは一八八九年にイギリスで開発されたが、現在とは少し形状が異なり、一九二五年にアメリカで現在のようなティーが発明された。

　昔も今も、ドライバーを使う時のティーの高さは六㌢前後だった。しかし、小針はそれより三㌢は高くしていた。市販品ではそんなに長いティーはなく、小針は市販品の杭部分を継いで、自分に合う高さを求めた結果だった。

　小針は「大正5強」の中で飛距離だけでは、誰にも勝てないと自覚していた。一番小柄で、すでに触れたように、体の関節が硬く、体のひねりがライバル達よりは浅くならざるを得なかった。そのハンディを少しでも補うには、せめて好天の日には、高いボールを打ちたかった。高ければ飛球線は伸び、遠くに届くはずだからだ。

　小針にとっては、十歳年上の宮本留吉は怖い存在だった。「一緒に回って、短いパットを残してマークしようとすると、『打ってしまえ』とどやされた。こっちが決めることだろうと思ってもさからえなかった。宇都宮の後輩プロの大島富五郎が、日本プロで石井朝夫、戸田藤一郎から受けた仕打ちを、小針はとうに喰らっていた。だからこそ、大島を励まさずにはいられなかった。

他人のスイングでも自分にとっていいものは取り入れる。その宮本のドライバーのスイングをまねようと思った。宮本も結構高いティーを使っていて、小針もティーを思い切って高くしてみた。たまたまその時は肩を痛めていたが、その痛みが出なくなったような気がした。それに考えてみれば、例えば打ち出しで地上より二㌢高く置かれたボールが、百数十ヤード先では飛行線の高さはどれほど違ってくるか。その分、落下地点も先になり、飛行距離は伸びるはずだと考えた。

宮本はティーを高くしていただけでなく、ボールから離してアドレスを取っていたが、小針はさらに離した。そうしたのは、クラブヘッドが降りてきて、円運動の最下点を過ぎ、円弧が上がることになるが、その上がり際でフエイスがボールを捉えるようにしたかったからだった。

小針は小さい体をカバーするため、アプローチ、パットを磨いていたから、インパクトには自信があった。それに加えて、高いティーを使いこなすことが出来て、ドライバーが得意クラブになった。「ワシにとっては、ドライバーショットは一番やさしいショットだ。好きなようにティーの高さは変えられるし、インパクトが身に付けば曲げることはない」が持論だった。

「ドライバーを左に引っかけたことは、生涯一度もない」が口癖だった。とくに、スタートホールで曲げることはなく、「スタートで首をかしげる人が不思議でならなかった」とも。

高いティーを使い始めた当時、そんなものは市販されていなかった。二本のティーのうちの片方を杭だけを切り落とし、それを継げば倍の高さのティーが出来た。クリークを手作りした小針だから、造作もないことだった。

二本を継ぐのにビニールテープを巻いたが、色は必ず白を使った。色弱を補うため、ティーグランドの上で、少しでもティーの位置つまりボールの位置を認識し易くするためだった。大島が本人からそう聞いている。

四番ウッドをヤスリで削ってクリーク（5番ウッド）にしたのは、グリーンに乗せるのと、絶対に左に行かせないクラブを持ちたかったからだ。それをバックに入れたのは一九五五（昭和三〇）年に中村を下して、プロ二勝目の関東プロに初優勝した試合からだった。以来、「クリークの名手」「アプローチの名手」とも言われた。

その理由について、本人は「恥ずかしながらアイアンが下手だった。まともに打てたのは9番以降。8番より前はきちんと打てなかった」と述懐していた。しかし、霞ヶ関カンツリー倶楽部で切磋琢磨の日々を共にした竹間正雄は「アイアンのキレだって相当な球でした。七十歳過ぎた頃、あるゴルフ雑誌が小針さんのアイアンショットの分解写真を載せたことがあった。じつに美しいフォームでした」という。アイアンは「寸分狂わずに」を求め、より高みを目指す、小針本人の感覚に沿わないだけだったかもしれない。

「ワンパット・ゴルフ」。小針は一九六三（昭和三八）年二月に報知新聞社からレッスン書を出している。一九七二（昭和四七）年まで七版が出ているから、長寿のレッスン書だ。著者のことばとして、小針はこう書いている。

「ゴルフに限らずなんでも、研究すればするほどむずかしい。私はどうしたら恥ずかしくないゴルフができるか、そればかりを考えて練習している。ゴルフは結局手で球を打つのだから、手の使い方をもっと合理的にやればよい。中年すぎるとだれでも体が硬くなる。それをどう補って柔らか味を出すかが課題だ。またおなじ硬いからだでも人によっていろいろ特徴がある。これを早く発見して自分のスイングを完成するのが大切だ。私のスイングも同じで、苦心のすえ身につけたものだ」

著者紹介で報知新聞ゴルフ編集部・浜伸吾は次のように紹介している。その小さい見出しは「あくまで研究的、天才型でなく人一倍の努力型」とある。

「小針春芳プロはアプローチとパットがとびぬけてうまい。試合で彼にぶつかったプロたちは『グリーンをはずしてもかならずパーを取るからやりきれない』と口をそろえてほめる。これは相手に精神的圧力をかける切り札になる。グリーンにのらなくてもパーをとったり、乗ればロングパットを決め、チャンスはしぶとくつかむ……。その可能性がたえずつきまとっているので、相手は根負けして、それまでのよいペースを崩す。それほど鋭いカンを持っているのに、彼のことを“天才的”だというものは一人もいない。むしろ『小針ぐらい練習するのはめずらしい』と彼の練習量の方を高く評価いている。関東プロ協会会長の村上義一氏は『あの繊細なカンのゴルフは人一倍の練習でささえられるもの』と努力だけを買っている。（中略）小針プロは自分の欠点をカバーする方を心にくいほど知りつくし、当たりが悪ければ、すぐ調節して切り抜ける。自分の特徴をいかし、しかも基本にしたがった実践的なゴルフである」

このレッスン書で小針は、総論的な［スイングのコツ］から始まり、［パット］、［アプローチ］、［バンカー・ショット］、［ラフ］……［6番ウッド］、［ドライバー］の順で、極めて実戦に沿って解説している。パットから始める理由について、小針は「“球を打つカン”を一番つかみやすいのはパットで、これで微妙なカンを養ってこそ大きなショットもこなせるわけだ。パットはプレーのしめくくりをすると同時に、スタートでもある」と書いている。小さいものから大きなものへは、小針の普段の練習サイクルでもあるし、練習量もその順だった。

二，三箇所、レッスン書に書かれて“奥義”を引かせてもらおう。小針の一人称として読んでもらえばいい。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

プロ仲間や新聞記者たちから「小針はすごく粘り強くて勝負にたいする執念が激しい」と思われている。勝ちたいと思う気持ちは私に限らずだれでも同じだが、みんなが考えるほど勝負にこだわっていない。むしろあとに悔いを残さないよう全力を尽くすだけだ。

粘り強いと思われている原因は、アプローチとパットからくるのではないか。ドライバーを曲げて苦況に立っても、どうにかショートゲームでカバーするから、相手が精神的な負担を感じたり、見ている人は執拗に食い下がっているように思うわけだ。自分のマイナスを補う防衛手段に過ぎないのだが……。

うまいゴルファーほどパットを大切に扱う。しかもパットで一番重要なのは距離感だから、これに力を入れて練習しているうちにほかのショットの距離感も洗練されてくる。パットに限らず、ゴルフに大切なのは距離をいかに正確につかみ、それを体で表現するかにある。

《パットについて》

パットはカップに届かなければ入らないのだから、オーバーするぐらいの強さで打つべきだという意見が多い。確かに届かなければ入るチャンスはゼロだ。しかし、強めのパットには球がカップに吸い込まれる入り口は一つしかない。つまりカップ中央めがけて走る球ならよいが、左右の端の方ではカップをとびこしてしまう。ちょうど、届くくらいの強さのパットは左右からでも流れ込む。換言すれば入り口が三つあるわけだ。これが一番理想的な打ち方だと思う。

《6番ウッドについて》

ゴルフ道具の中で何が一番むずかしいか。やはりロフトの少ないクラブだろう。ドライバー、ロング・アイアン、パターなどだ。ドライバーは自分の好きな場所へ好きな高さにティー・アップして打てるから、それほどやっかいではないが、もしフェアウェーでドライバーを使えば、打球が上がりにくくとたんに難しいクラブになってしまう。ロング・アイアンも同じ理由からやりにくいわけだ。

パターがむずかしいのは、クラブ・フェースの中心点に正しく当てることと、直径4・25インチ（10・8㌢）の小さな穴へ絶対入れなければならない宿命を持つからだ。こんなことをいちいち説明しているのは、ロフトの少ないロング・アイアンをムリして使うよりも、6番ウッドという便利なクラブのあることを認識してもらいたいからだ。

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

平易な文章で、小針のフォームの分解写真が豊富に編集されており、ビギナーが読んでもいちいち腑に落ちる。小針ゴルフの“神随”が宿っている一冊でもある。

おわり

編集後記

「いちご一会国体」のゴルフ女子競技が大過なく終了、われわれクラブとしても気の休まる思いだ。寒さと雨でコンデションはいまひとつだったが、あるがままの自然の中で戦うゴルフならではで致し方ない。競技２日目の雨はグリーンに浮き出て、３つの競技コースのうち、１コースはそれを取り除くのに苦労した。しかし、塩カンはその手間いらずで、水はけのよさを実証した。コース管理部門を外部に委託して、整備に力を入れた会社側に拍手を送りたい。また、クラブ側にしてもコース委員会の主導で、老朽化したクイの交換、目土入れ、雑草取りなど、ボランティアとして協力を続けて来たかいがあったというものだ。会社、クラブとも胸を張っていい。塩原カントリークラブのコース、運営のさらなる進化を祈念したい。

井上安正